

狂言類型曲の成立順系譜論(一)

―言語論争の狂言について―

林 和 利

一、はじめに

狂言には似たような趣向・構成の作品群が存在し、これを類型曲と称している。たとえば、「百姓物の類型曲」などと言う。

狂言類型曲の成立系譜を考究した論考には、橋本朝生氏の「福神狂言の形成と展開」(注1)や同氏の「百姓狂言の形成」(注2)などがある。前者は、福神狂言に連歌系と狂言風流系とがあったとしたうえで、「連歌系の方が狂言風流系に先行した可能性は大きい」という結論に至っている。また後者では、「百姓狂言は和歌を不可欠の要素としていて、福神狂言の連歌と対応しかつそれより古いことを示している」と結論されている。

私はかつて、「狂言「右流左止」の変遷と類型曲の系譜」と題した論考(注3)の中で、「右流左止」の類型の狂言、すなわち言語論争の狂言の系譜についても言及し、簡単な試論を提出しておいた。しかし、そのときは紙幅の余裕がなく、分析考察の過程を省いて、結果のみを掲げるに終わっていた。

本稿ではその問題を再び取り上げて考察過程を明らかにするとともに、さらに検討を加えて前項の系譜案を修正しつつ、詳しく論じてみたい。

なお、古歌や謡を引用して言葉の論争をする趣向の狂言には、「右流左止」以下、「歌争(土筆)」「舟ふな」「花争」「おひやし」「鶏流(鶏泣)」などがある。

「右流左止」は禁句の指摘が古歌によって反駁されるものであり、「歌争」は、古歌の珍妙な読み誤りを指摘して笑うものである。「舟ふな」はふねとふな、「花争」は花と桜、「おひやし」は水とおひやし、「鶏流」は鶏が鳴くと歌うを、それぞれ和歌や謡曲の用例の典拠をあげて正否を言い争うものである。

さらに、「筒竹筒」「鳴子遣子」「鴈雁金」も、同じ物の異称論争という意味で、この系列に入ってくる。しかし、このうち前者二曲は前掲曲のように和歌や謡を決着の論拠とするものではないし、「鴈雁金」は全体の設定がむしろ百姓狂言の類型に入るものである。これらを同時に扱うと論述が複雑になるので、いちおう別の扱いとし、後で補うこととする。

本稿は、これら言語論争の狂言を成立順に並べ、その系譜を解明しようとするものである。

二、先後関係の判断要素

この問題を考察するにあたり、成立時期の先後関係を推測しうる

要素をあげておく。

①同じ狂言なのに流儀間もしくは台本間において曲名に異同のあるものは、異同のないものより成立の古い可能性が高い。

成立が新しければ曲名の異同は少ないはず。長い伝承の過程でこそ曲名が変化する可能性も出てくると考えられるからである。もちろんそれは大雑把な一般論であって、個別の特殊事情は脇に置いてのことである。以下の②④⑤の要素も同様。つまり、本稿は一般論による理論的仮説を導き出すとするものである。

②流儀間もしくは台本間において内容的に異同の大きい狂言は、異同の少ないものに比べて成立から長い時間が経過している可能性が高い。

長い伝承の中では、さまざまな演出の工夫が行われることもあり得ようし、無意識に変化することもある。新しいものより古い曲の方が変容の幅が大きい可能性があるのは自明の理である。

③各曲の成立は資料的初出時点よりも前である。

もちろん、初出の時点がそのまま成立の時点に一致することもある。ただし、室町時代においては狂言の曲名が記録されることが少ないので、そういうケースはほとんどないと見てよい。いずれにせよ、初出時点を含んで、それ以前である。

④ストーリーの内容として、その構成や展開に共通点があれば、相互に近い時点の成立である可能性がある。少なくとも影響関係が考えられる。

その場合、両者の比較において、単純な構成の曲は、より複雑な構成の曲より成立が先行する可能性が高い。

⑤細かな趣向が似ている曲どしは成立が近い可能性がある。少なくとも影響関係はありうる。

この場合も、より単純な趣向の曲は、複雑な趣向の曲より成立が先行する可能性が高い。

三、曲名に異同のあるもの

言語論争の狂言のうち、①の要素、すなわち曲名に異同のある狂言は、「右流左止」と「歌争」「鶏流」「花争」の四曲である。具体的には次のとおり。

「右流左止」：大蔵流『虎明本』と和泉流『波形本』『狂言集成』『三百番集』および鷺流『保教本』『森藤左衛門本』などに収録され、すべて「右流左止」となっているが、その原形と見られる『天正本』が「きんみつ」という曲名になっている。

「歌争」：大蔵流『虎明本』『虎寛本』『山本東本』および鷺流『保教本』『賢通本』『山口鷺流本』で「土筆Ⅱどひつ」、『天理本』以下各種和泉流台本で「歌争」、大蔵流『虎光本』『茂山本』で「土筆Ⅱつくづくし」、『狂言記外』と鷺流伝右衛門派の名寄の一本で「歌相撲」となっている。

「鶏流」：『虎明本』『虎寛本』『虎光本』など大蔵流諸本で「鶏泣Ⅱけいりゅう」、『天理本』『和泉家古本』『狂言集成』『三百番集』など和泉流諸本および『保教本』など鷺流諸本で「鶏流」、大蔵流と推定される一本(注4)のみ「鶏鳴」で、『統狂言記』は「鶏立の江」である。

「花争」：三流諸本すべて「花争」だが、『統狂言記』のみ「桜浄」したがって、曲名異同の多さでは「歌争」と「鶏流」に軍配がある。しかし、あとで見ると初出文献の古さでは、『天正本』に原形が所収されている「右流左止」に分がある。

単純に考えれば、初出文献の古い方が早いということになるが、『天

正本』が当時伝承されていた狂言のすべてを収録しているとはかぎらないので、それだけでは断定できない。

いちおう「右流左止」（きんみつ）を別格とし、「歌争」と「鶏流」は古い可能性が高いとしておく。また、三流に異同がなく『続狂言記』のみ異なるという「花争」は、必ずしも古いとは言えないだろう。『狂言記』類の曲名だけが異なるというのは珍しくないからである。

四、内容異同の大きいもの

流儀間・台本間において筋書きなど内容的に異同が大きいのは「右流左止」と「歌争」「おひやし」である。もちろん他の曲も流儀間の異同はあるのだが、引用歌などに違いがあるという程度で、ストーリーが大きく変わるというわけではない。曲名に異同のあった「鶏流」も内容的には大きな異同がない。

そこで、この「右流左止」「歌争」「おひやし」の三曲にしぼり、なるべく成立が近く、かつより古い台本によって詳しく吟味してみる。

①「右流差止」

「うるさし」という言葉を使って良いか悪いかという論争をするのが、この狂言の骨子である。使ってはならないと言われた女が、『伊勢物語』に出てくる「武蔵あぶみさすがにかけて頼むにはとはぬもつらしとふもうるさし」という歌を引いて反論するというもの。この中心部分は各流共通である。

三流諸本の間において大きな違いがあるのは、導入部と結末部である。その部分に注目して比較してみる。

〈導入部〉（「うるさし」という言葉が出てくるまでの過程）

○大蔵流『虎明本』：長らく在京した塩飽の藤三が、領地安堵・新地拝領のお礼参りに清水の観世音へ行く。藤三は参詣に来ていた女の美しさに見ほれて、妻になってほしいと頼むと、女が「うるさい事や」という。

○和泉流『狂言集成本』：西国で名を知られた塩飽の藤造が諸国の名所旧跡巡りを思い立ち、明石の浦へやつてくる。そこに若い女が一人で茶屋を営んでいたため、藤三が夫を持つことを勧めると、女は「なううるさやのく」と言う。（注5）

○鷺流『保教本』：長期在京中の西国の大名が、太郎冠者を連れて清水の観音へ参詣に行く。大名は日参に来ていた門前の娘の美しさにひかれ、酒の相手に国元へ連れて帰りたいと思う。そこで持参の酒を勧める。断る娘に執拗に勧めるので、娘は「ア、ウルサイヲ人達シヤ」と怒る。

〈結末部〉（論争に負けたのち）

○大蔵流：藤三が、「師匠はあがむる物じや」と女を背負って入る。

○和泉流：藤造は弟子にしてくれと言いい、酒を酌み交わし舞を舞い、兩人「名残惜しや」と別れを告げる。

○鷺流：女が、自分もいとしくなったのでお心に従うと言うので、大名は女の手を引いて入る。

（比較台本はすべて導入部に同じ）
また、この狂言の原形とおぼしき『天正本』所収「きんみつ」の内容を示し、これらと大きく異なっていることを、改めて確認しておく。

○『天正本』：津の国芦屋の里に住む公光は歌道に通じ、とりわけ『伊勢物語』については知り尽くしたという。あるとき、在原業平と二条の後の夢を見、その住所を「都の雲の林」と告げられたので、

雲林院を訪ねる。参籠すると、また夢で、武蔵野に『伊勢物語』についで面白くあると聞き、東国へ下る。花を摘む女に声をかけると、女は「うるさい」と言う。公光が、『伊勢物語』にその言葉はないと笑うと、女は「武蔵あぶみ」の歌を所望する。公光が、「武蔵あぶみすがにかけて思ふには間はぬもつらし問ふもうるさし」と詠み、「うるさし」という語があるので逃げるのを、女が追い込む。すでに知られているとおり、この前半は能「雲林院」と同趣向である。

「右流左止」と共通するのは、『伊勢物語』引用歌でやりこめるところ。あとは大きく異なる。

②「歌争」

○大蔵流『虎明本』「どひつ」…何某一と何某二の二人が野遊びに出掛け、つくしを見て、一が「つくづくしのくびぐんなり」と詠むと、二は笑う。一は腹を立て、用例の古歌があると言い、「わがこひは、まつを時雨のそめかねて、まくずがはらに、風さはぐんなり」を挙げる。また芍薬を見つけ、一が芍薬は詩歌に詠まれないものだと言うと、二は古歌に「なにはづに、しやくやくの花冬ごもり、今を春べとしやくやくの花」があると言う。一は、それは「さくやこの花」だと言う。二は、歌に負けても相撲にはまけないと挑むが、かえってうち倒されてしまう。

○和泉流『天理本』「歌あらそひ」…あたりの者(アド)が連れ(シテ)を野遊びに誘いに行くと、シテは芍薬が盛りだからと屋敷の中へ通す。アドが芍薬を詠んだ歌があると言うと、シテは芍薬は歌には詠まないものだと言う。アドが仁徳天皇の作として「なにわづに、しやくやくの花冬ごもり…」をあげる。シテはそれは「さくや此花」だと、間違いを指摘する。野に出るとつくしが出ているので、シテ

が「春の野に、つく／＼の首、しほれてぐんなり」と発句を詠むので、今度はアドが笑う。シテが古歌にあると、慈鎮の歌「わがこひは…まくづがはらにかせさわぐんなり」を挙げると、アドは誤りを指摘する。腹を立てたシテは、アドがかつて相撲で負けたことを持ち出して笑い返す。アドは腹を立て、シテの足を取って倒して入っていく、シテが追い入る。

○鷺流『保教本』「どひつ」…このあたりの者(シテ)が知人(アド)を誘って野遊びに行く。シテがつくしを見て、「春野、二土筆ノ首塩折グンナリ」と詠むので、アドが笑う。シテが古歌「我が恋ハ…真葛原ニ風サハグンナリ」を引いて反論するので、アドは「騒ナリ」だと訂正して、また笑う。今度はアドが芍薬を見て、「難波津ニ芍薬ノ花冬コモリ今ハ春辺ト芍薬ノ花」と詠むので、シテが、それは王仁の歌で「咲ヤ此花」だと訂正して笑う。シテは無理に相撲を挑んで勝つ。

大蔵流と鷺流は大筋においてほとんど同じである。また、和泉流は持ち出す歌の順番が前後しているだけである。野遊びの前提などは同じであり、全体的に見て大きな違いとは言えない。

③「おひやし」

○大蔵流『虎明本』「お冷し」…主人は太郎冠者を連れて北野のお手水の会に行く。その途中、茶屋で休んで茶を飲むが、それが熱い。そこで「おひやし」を入れよと命じたことから、冠者と、水・お冷やしについての論争となり、用例の古歌の応酬となる。冠者は源順や西行などの歌を出す。主人が「ほと／＼とたゝひておひやしをもちてまいりたり」と謡うと、冠者が「そうべうのしんとして、ゆみやの名を、まほらせ給ふ、いはし水の、みづ／＼／＼」と続け、主人が「うせおれ」と叱って留める。

○和泉流『天理本』『お冷』…主人が太郎冠者を呼び出し、涼みのために東山の清水へ行く。まず、手水を使おうと滝へ下りる。主人が滝の「おひやし」を掬ってこいと言ったことから、水かおひやしかの論争になる。冠者は西行の故事を語り、「たのみつる麦粉は風にさそわれて、けふさめがいの水をこそめ」という歌を詠んだことを論拠とする。主人は「おひやし」と作った謡があると言い、「妻戸」を歌い出すが、「いわし水」のところで口をふさぐ。冠者がその後を「いわし水のながれをうけ、放生川の水くまん」と謡い、「にくいやつ」と叱られる。

○鷺流『保教本』『御冷』…主人は太郎冠者を連れて清水へ参詣する。社前に着き、主人は、清めのため「御冷」（おひやし）を掬ってこいと冠者に命じる。それで水かお冷しかの論争になる。冠者は西行や貫之などの古歌を次々に持ち出して「水」の用例を並べる。そこで主人は、「御冷」を使った謡があると、「妻戸ヲホトくゝトタ、イテ御冷持テ参リタリ…」と謡うと、冠者があとを取って、「石清水ノ流ヲ請放生川ノ水汲マン」と謡い、叱られる。また、替えの語りとして、冠者は西行の故事を語り、「頼ツル麦粉ヲ風ニサソハレテケフ醒井ノ水ヲコソノメ」という歌を論拠に出す型を付記する。

導入部の状況設定や謡の詞章が、和泉流と鷺流は近いが大蔵流とは大きく異なっている。成立が古い要素を持っていると言えよう。

④内容の相違から見た先後関係
『天正本』に所収されている「きんみつ」はたまたま所収されたものかも知れない。つまり、他の曲も原形がないとは言えないので、このことはひとまず置くとして、それ以外の諸本・流儀差を考えてみる。

まず、導入部と結末部に大きな違いの見られる「右流左止」の方

が長期にわたる変化の結果だと判断しうる。

また、「おひやし」の異同も大きい。結末部は三流とも叱り留めなので、「右流左止」よりは少ない異同と見るべきだろう。

「歌争」は質的に大きく変わっているわけではない。

内容的相違という観点では、「右流左止」が最も古く、次が「おひやし」で、「歌争」がその次に古いという判定になろう。

「おひやし」と「歌争」の順序が、曲名異同による判定結果と食いちがうが、この問題は後述の視点で解決できる。

五、初出文献の吟味

該当各曲の初出文献を確認しておく。

「右流左止」（きんみつ）…「右流左止」としては『虎明本』（寛永一九年＝一六四二）だが、原形の「きんみつ」は『天正狂言本』（天正六年＝一五七六）。

「おひやし」…『虎明本』。

「歌争」（土筆）…「土筆」どひつ」の曲名で『虎明本』。

「鶏流」…「鶏泣」の曲名で『虎明本』。

「花争」…『虎明本』。

「舟ふな」…『虎明本』。

というわけで、「きんみつ」以外はすべて『虎明本』が初出である。「きんみつ」を原形とする「右流左止」のみが先行する可能性が高いが、それ以外の作品はこの観点で先後関係を判定することはできない。

六、構成・展開の共通点

冒頭で述べたように、類型曲というのは、趣向・構成が似ている

からそういうのである。したがって、ここに取り上げたものはすべて、言語論争という構想に共通点がある。

その中で、さらに細かい共通点・類似点を考えてみよう。

① 謡によって決着がつくもの (比較分析はすべて『虎明本』による)
「花争」「おひやし」「舟ふな」は両用の表現が含まれる謡によって決着がつくという意味で似ている。

「花争」は、太郎冠者が謡で「桜かさしの袖ふれて」と言いかけ、主人がそのあとを「花見車暮るるより、月の花よ待たうよ」と続け、桜とも花ともいうことが証明される。

「おひやし」は、主人が「ほとく」とたゞひておひやしもちてまいたり」と歌うと、冠者はそのあとを受け、「そうべうのしんとして、ゆみやの名を、まほらせ給ふ、いはし水の、みづくくく」と謡って叱られる。

「舟ふな」は、主人は能「三井寺」の一節を思い出し、「山田やはせのわたし舟の、よるはかよふ人なくとも、月のさそはど、おのつから、舟もこがれていつらん」と謡い、太郎冠者が「ふな人もこがれ出つらん」と続け、「ふな」とも言うことが証明される。

これらの諸曲は展開としても趣向としても近い存在であり、影響関係が考えられる。成立も近い可能性がある。

② 語りの含まれるもの

「鶏流」と「おひやし」には語りが含まれる。

「鶏流」では、太郎冠者が孟嘗君の故事を次のように語る。

こそうしと云ものゝ詩にいはいはく、せきくたるかんくわん戸
さしていまだひらかず、でんぶんがしやばしんの出来る、しゆ
もんに三千のかくをやしなはずんば、たれかけいめいをして、
はうかいする事をえん、是はもろこしに、かんこくのせきと申

(一六)

関の候が、鳥のなくこそをきくせきの戸をひらく、もうせうくと申ものうちもらされて、りんこくへ落て行時、夜半時分に、彼関に至り、鳥のなくまねをさせければ、まことかとぞんじて関の戸をひらく、かるが故になんくりんこくへ落たり、是にもそらなきしつるところはあれ、やはかうたふとはござあるまひぞ (『虎明本』)

また、「おひやし」では昔、西行が「頼みつる麦粉は風に誘われて今日左女牛 (または「醒ヶ井」) の水をこそ飲め」と詠んだという故事を語る。

扱も鳥羽の院の御時、佐藤兵衛則清といつし人、うき世をいとひ、もとゆひきつて、その名を西行法師となづく、彼西行、諸国をしゆ行して、ある時近江の国さめがいの宿につきたまふ、比は水無月半の事成しに、むぎの水粉といふ物をまいらんと、づた袋よりとり出したまふ所に、折ふし川風はげしくして、水粉をばつとふきちらす、其時西行の御哥に、「たのみつる麦粉は風にさそわれて、けふさめがいの水をこそめ」と、かやうによみおかれてこそあれ、やわか「おひやしをこそめ」とは承す候 (『天理本』) (注6)

やや長い引用になったが、語りという演技要素のみならず、最後に「やわか」と皮肉っぽくつつこむところも共通である。

この二曲は近い存在であり、成立も近い可能性が高い。

七、趣向の近い曲

「右流左止」は「うるさし」という禁句の指摘が、和歌における用例明示によって反駁されるものであり、「歌争」は和歌の誤読を指摘したものである。

読み誤りを指摘する「歌争」は、「右流左止」の形に他の曲より近いとする判断は動くまい。

これに対し、「おひやし」「鶏流」「花争」「舟ふな」の諸曲は、同じ物の異称を論争するパターンである。これらの曲もお互いに近似した存在と言えよう。

八、系譜仮説（一）

以上の考察に基づいて、言語論争の類型曲を成立順にならべるなら、次のように整理できるであろう。

【原案】

（きんみつ）↓「右流左止」↓「おひやし」↓「歌争」
↓「鶏流」↓「花争」↓「舟ふな」

しかし、これでは趣向が近いはずの「右流左止」と「歌争」が離れてしまい、同様に「おひやし」と「鶏流」も離れてしまう。そこでこれを修正したのが次の案である。

【修正案】

右流左止↓歌争
おひやし
↓鶏流↓花争↓舟ふな

つまり、「おひやし」を「右流左止」の流れと考えず、別系統のものとする考え方である。こうすると、矛盾なく、前述の諸要素が説明できることになる。

曲名異同と内容異同によって導き出される矛盾、つまり「歌争」と「おひやし」の先後関係の食い違いも、これによって解決できる。

しかし、そうすると、「おひやし」以下の異称論争型は、それ以前に、その前提となる下地があった可能性を考えてみたくなる。そこで浮上してくるのが、保留にしておいた「筒竹筒」と「鳴子遣子」「鴈雁金」である。

九、系譜仮説（二）

「筒竹筒」と「鳴子遣子」は、同じ物の別名の論争という意味では同じ異称論争でありながら、和歌や謡などの典拠を持ち出して決着をつけるのではなく、他者に判定してもらうという狂言である。

「筒竹筒」は筒と竹筒が、「鳴子遣子」は鳴子と遣子が、それぞれ同じ物であることを取り上げる。

両曲とも『天正本』に見えるので（ただし、「筒竹筒」は古名とおぼしき「鳩の神」の曲名のみ）、成立の古い狂言であることは確実である。両曲の先後関係を推測するなら、単純なためでたさを表現した「筒竹筒」がより古いであろうか。

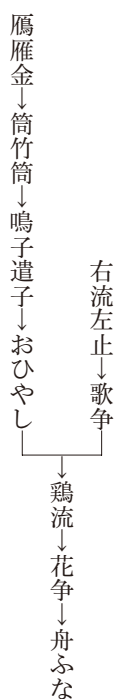
前述の言語争いの一連の狂言が、この二つの曲の影響も受けているとするなら、異称論争型の「おひやし」成立の段階で影響しているとみることができよう。それ以降「鶏流」「花争」「舟ふな」は、二つの趣向の流れを受けた系譜の中にあるとする仮定が成り立つわけである。

また、「鴈雁金」は、鴈と雁金が同じ物なのに、それを年貢として納めた二国の百姓がそれぞれの言い方を詩歌や故事を引用して主張するものである。異称論争には違いないが、類型的にはむしろ年貢納めの百姓物に属するので、別の系譜要素を持っていると見なければならぬ。そのうえ、この曲は永禄七年（一五六四）に相国寺八幡で催された石橋勧進能で演じられた記録があるので、それ以前の

成立が確実である。成立順としては「筒竹筒」の前に置いておきたい。

このことを加えて再度図示すると、次のようになるであろう。

【決定案】



十、むすび

最後の案を「決定案」とはしてみたものの、むろんまだ仮説である。

一曲の変容が、理論通りに移り変わるとは、必ずしも言えない。わずか一人の狂言師の、突然の思いつきで変わってしまうことだってないわけではあるまい。

ただ、先人の教えを重視して伝承していくことが基本の狂言では、そういうことがありにくいというのは事実である。そのために変容の度合いと時間的長さが一致する比率が高いとは言えよう。

本稿はそういう前提に立った理論的仮説である。

他の類型狂言にもこの方法論を当てはめてみたいと思っている。

注

- (1) 初出は『芸能史研究』46号(昭和49年7月)。のち同氏著『狂言の形成と展開』(みづき書房・平成8)に収録。

(八)

- (2) 初出は『中世文学』27号(昭和57年10月)。のち同氏著『狂言の形成と展開』(みづき書房・平成8)に収録。
- (3) 『名古屋女子大学紀要』第四十八号 人文・社会編(平成14・3)所収。
- (4) 幸田露伴編『狂言全集』(明治36・博文館)所収本。版本『狂言記』を収録したあとに、大藏弥右衛門本と推定される曲が百五十番収められている。
- (5) 和泉流最古の『天理本』に「右流左止」は収録されていないので、『狂言集成』を用いた。
- (6) 「鶏流」と同じ『虎明本』で比較すべきところであるが、『虎明本』の「お冷し」には語り部分の詞章が含まれていないので、この曲が収録されている台本の中で、その次に古い『天理本』を採用した。

【要約】

現行の狂言曲目のうち、言語論争を主題とする八曲を取り上げ、成立順の系譜を解明しようと試みたものである。

①曲名異同②内容異同③資料的初出④構成・展開共通点⑤趣向類似点―の諸要素に関して、分析考察を加えた。

その結果、「右流左止」を最古とし、以下「舟ふな」に至るまでの系譜が導かれることとなり、それを示して仮説とする。